

## ホールステッド博士の急逝を悼む

田 隅 本 生

本会会員の皆さんは、英国の古生物学者、ベヴァリー・ホールステッド (L.B. Halstead) 博士の名を多少ともご存じだろうと思う。5冊もの和訳書の著者であり、1984年11月に京都で第77回例会が開かれた際に型破りの特別講演(本誌17巻63-68参照)で聴衆を驚かせた人である。旧聞になるが、同氏は91年4月30日夜、無残にも自動車の衝突事故で死去された。レディング大学からバースの自宅へ車で帰る途中のことだった。享年57。

英国で出た多数の追悼記事などを総合すると、ホールステッド博士の略歴は次のようである。彼は1933年、ランカシア州ベンドルトンの生まれ。少年時代、英国共産党の法律顧問だった継父からマルクス主義の影響を受けながら育った。そして、10歳代後期には早くも、共産党機関紙「デイリー・ワーカー」に「Nature Notes」という連載記事を寄稿していたという。シェフィールド大学に入って地学を学び、55年に最優等で卒業。ついでロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッジに進学して古生物学、特にプリオサウルス類を専攻し、59年にPh. D.学位、66年にはD. Sc.学位を取得。大英博物館、オクスフォード大学、ナイジェリアのイフェ大学、インドのバンジャブ大学などで研究・教育の職を歴任、68年以降レディング大学地質学教室・動物学教室の上級講師を勤めていた。

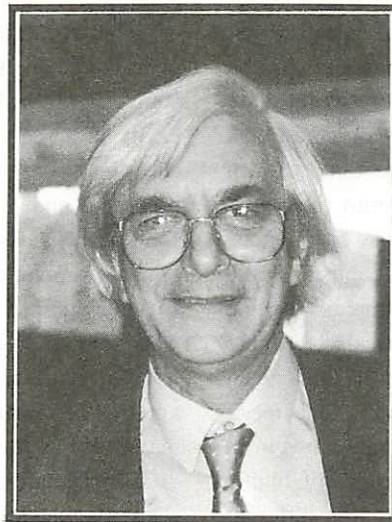
彼は初め長頸竜類を研究していたが、やがて興味を甲皮類における硬組織の起源の問題に移したため、この分野での業績で広く知られている。そのかたわら彼は、脊椎動物の進化を中心とする古生物学全般についても関心を深めると共に、研究成果を一般へ普及させる様々な社会的活動にも異常な情熱を傾けるようになった。死去したとき彼は、英国科学振興協会地質学部会会長、地質学者協会会長、学術誌 *Modern Geology* 編集長などの要職にあった。今年 R. オーウェンによる「恐竜」命名から150周年に当たるので、盛大な記

念行事を企画していたという。掌に入るような子供むけの本も含めて多数の啓蒙的な著書があり、総発行部数は100万部を超えるそうである。他方で彼は、G. ヴィーコの社会進化説を研究するなど科学哲学的な事柄にもだんだん深入りするようになっていた。

84年の秋、ホールステッド博士は京都大学理学部から招聘され、3ヵ月間京都に滞在した。その機会を利用して彼は、あらゆる手段を用い、多くの人々を騒ぎに巻き込みながら“今西進化論”を調査し、1冊の本の原稿を書き上げてしまった。88年に和訳・出版された『「今西進化論」批判の旅』(築地書館刊)がそれである。さらに90年3月には国際高等研究所主催の国際シンポジウム「生命の進化」(京都)に招かれ、「生命の歴史における革命と植民」と題する非常に啓発的な講演を行なった。(その議事録は *Evolution of Life* [S. Osawa and T. Honjo, Eds. Springer, 1991] として刊行されている。)

広範な知識、鋭い直観、正確な判断、批判精神と闘争性、反権威主義、大衆化の努力、無神論、皮肉とユーモアの連発、頑強なダーウィニズム擁護、力強い弁舌と文筆、仕事の速さなどが、彼の強烈

な個性の要素だった。かつて論敵だった大英博物館の分類学者 C. バターソンは追悼文の中で彼の人柄をこう評している：“a unique and remarkable man, charming yet infuriating, creative yet destructive.” 世界は稀にみる才気煥発の古生物学者を、まだまだこれからという時に失ってしまった。昨春彼は、92年夏に三たび京都へ来て万国地質学会議に参加したいともらしていたが、見はてぬ夢となった。猛烈に燃焼しつづけた生命が突然激しく終わったのは、彼らしい性急な生涯だった。無宗教式の葬儀が行われたあと間もなく、レディング大学とロンドンの地質学者協会がそれぞれホールステッド博士を記念する地学学生のための奨学基金を創設し、国際的な募金を始めたのはいかにもイギリス的なことである。



故ベヴァリー・ホールステッド博士  
(1990年3月、京都で)